

天親（世親）の唯識論と親鸞の他力念仏

張 偉

「如来の教法おほけれど 天親菩薩はねんごろに 煩惱成就のわれらには 弥陀の弘誓をすすめしむ」⁽¹⁾

「天親菩薩造論説 歸命無碍光如来 依修多羅顯眞實 光闡横超大誓願 廣由本願力廻向 爲度群生彰一心 歸入功德大寶海 必獲入大会衆數 得至蓮華藏世界」⁽²⁾

以上は親鸞の天親のとらえ方である。

このとらえ方は、念仏は唯識をも含む、たくさんの釈尊の教えの中から、煩惱成就のわれらにぴったりものとして、功德大寶海に歸入する道として選ばれたものとなる。この親鸞のとらえ方は従来の天親のとらえ方とは峻別している。

天親が大乗仏教の二つの頂点の一つである唯意識論の大成者であり、浄土教を発展させる源流である「浄土論」を作りあげたひたむきな浄土の願生者である。従来は唯識と他力念仏（浄土）は、天親の二つの主張それぞれ独立したものとしてとらえるようである。

八〇

親鸞のとらえ方の根拠を求め、『大正蔵』に収められている天親の「大乗仏教」に関係する著作と唯識についての論を丁寧に考察した。その過程

で、天親についての従来のとらえ方は不十分なところがあることに気づいた。例えば、天親と大乘仏教と小乗仏教の関係、『俱舍論』と大乘・小乗との関係、唯識と他力念仏の関係などである。本論は唯識と他力念仏の関係について問題提起したい。

（『大正蔵』に収められている天親の大乘仏教についての論と天親の唯識についての論は註の3・4参照）

一 唯識の二義性

筆者は、經典に天親に書かれた唯識についての論を読んで、「唯識」と「他力念仏」とのつながる道を探ってみた。

兄無著の縁によって大乘仏教にはいった天親は、その後、大乘仏教の興隆のために心血を尽くした。天親は華嚴、法華、涅槃などの経を解説した上に、多くの大乗論を著し、千部の論者とと言われる。その中で、築き上げられた唯識思想は、大乘仏教の理論の礎を高め、かつ強めるものになり、龍樹の「中論」とともに大乘仏教の理論の頂点を示している。

これらの作は、天親が「通法貫玄」（「十地経論」序『大正蔵』26巻 122ページ）と言われたように釈尊の大乘思想を透徹に理解しその奥深いところに入った上に書かれたものである。それ故に、天親は、大乘の先輩である馬鳴の説を自在に駆使し、龍樹の跡を継ぎ、「故能徴縦馬鳴継跡龍樹」（「十地経論」序『大正蔵』26巻 122ページ）「人梵乖遠」（人間界と如来界が背向いて遠く離れている）、「正像差廻」（像法時代の仏法は正法時代の仏法とはずれている）という像法時代の末期に、真の大乘仏教を広め、深めるのに大きな貢献をし、正法の松明を高く上げ、それを輝かせながら次の世代に伝えた。

従来天親において唯識と浄土（他力念仏）のとらえ方の不十分さの原

因を探ると、従来の天親の唯識論のとらえ方に問題があることに気づいた。

「一切の諸法は、識としての心が仮に現しだしたものに過ぎない」⁽⁵⁾

「自己と自己を取り巻く自然環境との全存在は自己の根底の心である阿頼耶識が示したもの、変現したもの」⁽⁶⁾

このような受け止め方によれば、天親の唯識の「識」は「自我の心」という意味になり、「唯識」は「唯の自我の心」という意味になる。このような受け止め方の問題点は、唯識の二義性を十分とらえていないところにあると思う。

本論は唯識の二義性について追究することを踏まえて、「唯識」と「他力念仏」とのつながる道を探ってみたい。

千部の論師と言われた天親の著作群は、その根底に冷徹な思索が寂然として湛えられ、仏法の理を深く説く宗教哲学の理論の書である。それは強力な説得力を持って人々の大乘仏教への信仰心を促している。その高い到達点は唯識によって示されている。それと同時に、それらの作はまた天親の深い信心の告白でもある。書物の行間に天親の深い感激の信仰心熱くたぎっている。信心の深さと仏法への理解の透徹さが渾然になったところ、それが天親の世界である。結晶した形で著されたのは、「浄土論」である。天親の唯識論は「浄土論」の踏み台になるものである。

天親の唯識論の中心論点は「唯識無境界」である。

「立義者。（中略）唯識無境界故」⁽⁷⁾

「唯識」はその論点の略語である。「諸法心為本 諸法心為勝 離心無諸法 唯心身口名」（「唯識論」天親『大正蔵』三十一卷 69頁）

識は心である。すべての法は、心（識）によって生じるものであり、心（識）の他に諸法はない。

天親の唯識論は阿頼耶識を中心とする八識として人間の心について重層的に分析する。

その「唯識」によれば、「心意與識及了別等如是四法義一名異」と、識は「心、意、了別」と異なる名前の同義語である。論は、釈尊の教えを根拠にして、煩惱の元が識にあると説く。衆生の執着心と執着される対象である環境は、実有するものではなく、縁によって識が転じられることより、形として現れるものである。

「識転有二。一転為衆生。二転為法。一切所縁不出此二。此二実無。但是識転作二相貌也。」⁽⁸⁾

「三界虚妄但是一心作」⁽⁹⁾

識はもともと静寂で形も動きもない、非作為的なものであるが、「業因業縁」の作用する力によって、識が動き始まる。

「業熏習識内 執果生於外」⁽¹⁰⁾

識は三種の縁によって、果報識（阿頼耶識）・末那識・六識（眼・耳・鼻・舌・身・意）という三次元的な動きとして現れる。

七
七
阿頼耶識は業識・果報識（業の影響を受ける体である）、本識（阿頼耶識を元にして他の七識の動きを生じる）、蔵識（一切の種子を蔵伏するところ）とも言う。その中に作為的な種が蔵伏している。

末那識は執識ともいう。執着はその体である。

六識は塵識ともいう。環境を感知する体である。

阿頼耶識と他の七識との関係は、鏡（阿頼耶識）と影（七識）の如く。

「如衆像影俱現鏡中」⁽¹¹⁾（「転識論」『大正蔵』31卷 60頁）。

また水（阿頼耶識）と波（七識）の如く。

「衆波同集一水」⁽¹²⁾（同前）。

宿業の影響を受けている阿頼耶識は、六識が、環境に感知するものを煩惱として受け止める。阿頼耶識における受け止めは微細であり、形にならない（細という）。その受け止めは末那識においては形をとる（粗という）。

論では、煩惱の対象を所分別（分別されるもの）、煩惱の主体である心の働きを能分別（分別するもの）と名づけ、両者がともに無であることを論理的に説く。

「是諸識轉變 分別所分別 由此彼皆無 故一切唯識」⁽¹³⁾

所分別は名前があるが、実体はない。心が煩惱の対象としてとらえるときそれは煩惱を感じさせるものになるが、心がそう思わなければ、そのものは煩惱とは無関係である。ゆえに、それは名はあるが、実体はない。また、煩惱の主体である心の働きは、そのものがあるが、真実ではない。なぜなら、

七
六

「如人目有映翳 見毛月等事」（人は目に影があるので、月を見るとき、月に毛があるように見える）⁽¹⁴⁾

のであるから。

そして、両者が「不一不異」（同じものではないが、異なるものでもない。互いに相手の存在によって自身が存在する）の関係でしか存在しないので、実体のあるものとはいえない。

「唯是内心虚妄分別」「為欲遮彼虚妄分別故。説色等一切諸法畢竟空無。」⁽¹⁵⁾

執着とは執着するものと執着されるものがすべて識の作用に過ぎない。であればこそ「唯識（唯の識）」である。識の他にあるものはない。唯（ただ）識である。

ここで立てられる識は阿頼耶識を中心とする識である。この識はなければ執着するものも執着されるものもない。ゆえに「唯の識」であるところの唯識が成立する。こういう意味での唯識は、識を中心において執着するものと執着されるものの無意味さを証明する。

従来の「自己と自己を取り巻く自然環境との全存在は自己の根底の心である阿頼耶識が示したもの、変現したもの」という天親の唯識論についての受け止め方は、以上に論じたところまでしかとらえていないようである。この受け止め方は、まず、天親の唯識論の中の肝心なポイントの一つを見逃し、「唯識」の二義性の中で、一義しかとらえていないのである。

ポイントとは、阿頼耶識に作用する力になるもの——「業因業縁」である。（「業熏習識内 執果生於外」「大乘唯識論」天親『大正蔵』31卷 72）

七五 阿頼耶識は業の影響を受ける体であるので「業識」ともいう。その影響により阿頼耶識を元にして他の七識の動きを生じる。そういう意味で阿頼耶識はまた本識とも言う。

要するに阿頼耶識を中心にする識は人間の心の働きのレベルの識である。

そのものは、本質的に「妄識」である。その根源になる阿頼耶識は心の深いところに蠢いている煩惱の源である。それは破られなければ、業因業縁を受ける種になる。この阿頼耶識から、常に煩惱・執着心・無明が生じるのである。であるから阿頼耶識は方便として仮に立てられるものであるが、最終的に破られなければならないものである。それを破らなければ、本当の唯識に入らない。

「若人修道智慧未住此唯識義者。二執隨眠所生衆不得滅離。根本識不滅故。（中略）二執隨眠所生果惑不得滅離者。即是見思二執隨眠煩惱能作種子。生無量上心。惑皆以本識為其根本。根本未滅支未盡。」⁽¹⁶⁾

「若謂但唯有識現前起此識者。若不離此執者。不得入唯識中。」⁽¹⁷⁾

すなわち、一口に「唯識」と言っても、識は二元的な意味をもっている。したがって「唯識」にも二義性を含んでいるのである。

天親の唯識論は心（識）を「相応心」と「不相応心」と言う二元的なものとして説き、「唯識」の二義性について論じたものがある。

「心（識）有二種。何等為二。一者相応心。二者不相応心。相応心者。所謂一切煩惱結使受想行等諸心相応。以是故言。心意與識及了別等義一名異故。不相応心者。所謂第一義諦常住不變自性清淨心故。」（『唯識論』『大藏經』三十一卷 64 頁）

「相応心」との識は、人間の計らいのレベルの分別心である。「不相応心」は、如来のレベルの円融至極の一如の心である。

阿頼耶識が破られるきっかけは、阿頼耶識の根底に潜んでいる。阿頼耶識の裏にもっとも深い、無限に広がっている大いなる識がある。それは、

第九識であり、真識である。この真識はすべての業を清浄する力を持っている。

(その力は親鸞においては本願よるものである。

「天人不動の聖業は 弘誓の智海より生ず 心業の功德清浄にて 虚空のごとく差別なし」⁽¹⁸⁾)

「識」の二元的な意味に、人間の計らいのレベルの仮に立てられる「相応心」の「識」は、衆生に今まで執着するものの無意味さを思い知らせ、衆生を執着心の束縛から解き放し、衆生を「真識」出会う道に導くためなのである。

「為化執我人」⁽¹⁹⁾ 「入諸法無我」(66)

「顕現為似色識生方便門」⁽²⁰⁾

相応心としての識は、衆生の無明を破るために一応主張されるものであるが、無明が破られるところに無明の根源としての「阿頼耶識」も破られるべきである。破ると言うより、無明の根源としての「阿頼耶識」が不相応心である識の働きによって質的な転換を得られるのである。煩惱相応心が破られるところにこそ、はじめて清浄心である「不相応心」である真識が自ずから現れてくるのである。この意味での識こそ天親に主張される唯識である。

「唯破妄識煩惱相応心。不破仏性清浄心。」⁽²¹⁾

「不相応心」は、如来のレベルの「唯識」である。「第九識」・「仏性実識」・

「真如識」・「真識」・「唯識実性」ともいう。それは第一義諦・清浄心である。真如・大慈大悲と同義語である。

「此諸法勝義 亦即是真如 常如其性故 即唯識実性（中略）是名不可思惟。是名真实善。是名常住果。是名出世樂。是名解脫身。於三身中即法身。」⁽²²⁾

この意味での唯識は本物である。

「由此義故立一乘」⁽²³⁾

「此諸法勝義 亦即是真如 常如其性故 即唯識実性」⁽²⁴⁾

この識は「真識」である。そこに万法、森羅万象、すべての識が摂られる。その以外にあるものはない。

「如是唯有真識更無余識。」⁽²⁵⁾

「唯識」の二義性のところに、仮に立てる「唯識」と真の「唯識」の間には、如来が衆生の心への深い配慮がこめられ、世間の真実と超世間の真実のつながる道が用意されている。この二義性に「真俗二諦」、「破」と「立」と言う仏教の教えの根本が含まれている。

「即依此三性（相応心の三性 筆者注）立彼三無性（不相応心の三無性 筆者注） 故仏密意説 一切法無性」⁽²⁶⁾

「前二是俗諦。後一是真諦。真俗二諦撰一切法皆尽。」⁽²⁷⁾

「頂礼大乘理 当説立及破」⁽²⁸⁾

「如来方便漸令衆生得入我空及法空故説有内識。而実無内識可取。」⁽²⁹⁾

「此三無性是一切法真実。以其離有故名常。欲顯此三無性故。明唯識義也。」⁽³⁰⁾

天親の「識」には仮に立てる「識」と真に主張される「識」という二元的なものがあることを考察した。「唯識」には二義性、すなわち表層的な意味と深層的な意味がある。「自己と自己を取り巻く自然環境との全存在は自己の根底の心である阿頼耶識が示したもの、変現したもの」という従来を受け止め方は天親の唯識の中での一元的な意味、「相応心」と言う次元の識である。それは人間の計らいのレベルの分別心であり、方便として仮に立てられるものであり、天親が主張する「唯識」の表層的な意味であり、深層的な意味に入る踏み台である。

天親の唯識の深層的な意味は、ただ如来の心であることを主張するのである。その「識」は、「不相応心」であり、「真如識」であり、唯一の識、絶対不二の一如、一心である。人間の分別心を超える一如の識である。大乘の理を示す一乗である。釈尊のすべての教えを貫いている大慈大悲である。「浄土論」の中で「爲度群生彰一心」の「一心」である。それは親鸞においては本願である。「立」と言うが、人間の計らいで立てるものではなく、もともと自然（じねん）のまま立ち現れているものである。人間の計らいの「識」が根底から破られるところに、「真識」がおのずからたちあられるはずである。この真識に出会うことはすなわち仏教の求道者の目標である。真識の境界はすなわち涅槃界であり、仏教の求道の道の最高の到達点である。

「究竟一乗者即是無辺不断。大乘無有二乘三乘、二乘三乘者、入於一乘。一乗者、即第一義乘。唯是誓願一仏乗也。」⁽³¹⁾

二 「唯識論」と「浄土論」とのつながり

識の二元、「唯識」の二義性について述べてきたが、その二元的な「識」の関係については、天親は意味深く説いている。

まず論の中で、天親は二元的な「唯識」の次元的な異なりを強調し、「真識」の不思議さ、人間の計らいで知ることも、届くこともできないことを説く。

「如彼仏地如実果体無言語処勝妙境界。唯仏能知余人不知。以彼世間他心智者於彼二法不如実知。以彼能取可取境界虚妄故。彼世間人虚妄分別此唯是識。無量無辺甚深境界非是心識可測量。」⁽³²⁾

「唯佛如実知 作此唯識論 非我思量義 諸仏妙境界 福德施衆生」⁽³³⁾

「如来方便漸令衆生得入我空及法空故説有内識。而実無内識可取。
(中略)「唯識論者。乃是諸仏甚深境界。」⁽³⁴⁾

「此境唯仏所見」⁽³⁵⁾

「無得不思議 是出世間智 捨二粗重故 便証得転依 (中略) 此即無漏界 不思議善常 安楽解脱身 大名法牟尼」⁽³⁶⁾

二元的な「識」の関係についての結論は、真の「唯識」の境界は「無量無辺甚深境界」であり、人間の「心識」では測量すべきではないと断言する。

したがって唯識を説く意図も明確である。

「頂礼大乘理 当説立及破 無量仏所修 除障及根本 唯識自性静

味劣人不信」⁽³⁷⁾

恭しく大乘理をいただくことである。それは障りを除く根本である。真識と出会う道は解脱の道であるが、それは仏の働きに依る他ない。「相応心」と「不相応心」が此岸と彼岸の異なりであり、此岸から彼岸へいくには大乘に乗ることである。

「如是所成唯識性相。誰依幾位如何悟入。謂具大乘二種種性。」⁽³⁸⁾

と言う問答の形で、具体的に「真識」に悟る道について述べている。その道として菩薩の修行の段階を示す「五位」を挙げる。「五位」は釈尊の「十地経」をよるところにする。「十地経」は大乗菩薩の修行階位である十地によって菩薩行を説き、無上の仏果を得る道を明らかにしている。釈尊自身にも十地に密意が潜められていることを明示している。

「唯諸仏子。一切菩薩有十智地。是以過去未來現在諸仏。已説当説今説。由此密意我作是言。」⁽³⁹⁾

すなわち、密意を説くためにこの十地を説くのである。この十地は大切な教えであり、過去諸仏もすでに説いており、未来の諸仏も説くであろうし、現在の諸仏も説いているものである。

その密意をあきらかにするところには、天親の唯識と他力念仏を結ぶ道がある。それは十地の中での第七地、いわゆる「七地沈空難」についての受け止め方にある

六
九

自力の修行によって功勲を積み重ねて仏の果を得るように語られるこの修行階位である十地には、実は自力の修行で超えられない難関を用意して

いる。それは「七地沈空」の難である。

「一定清浄。一定垢穢。是中間難可得過。但以大精進力。大神通力。大願力故。能過耳。諸仏子。諸菩薩如是。行於難道。難可得過。但以大願力。大智慧力。大方便力故。乃可得過。」⁽⁴⁰⁾

「譬如有二世界。一処雑染。一処純浄。是二中間。難可得過。唯除菩薩有大方便神通願力。乃可得過。仏子。諸菩薩諸地亦覆如是。有雑染行。有清浄行。是二中間。難可得過。唯除菩薩有大願力方便智慧力。乃能得過。」⁽⁴¹⁾

七地は、清浄界と雑染・垢穢界、世間と出世間の中間地帯である。煩惱としての存在と解脱としての存在の最後の分水嶺である。ここは、菩薩が今までの煩惱である自身と最後に決別する場所です。ここに至って菩薩は今までの煩惱界から身を抜け出しているものの、真の涅槃界にはまだまだ入っていない。

「菩薩於七地中得大寂滅、上不見諸仏可求、下不見衆生可度」⁽⁴²⁾

と、上に求めるべき諸仏が見えないが下に度すべき衆生が見えない。進退これ谷の「難」に陥ってしまう。

「譬如人夢中作筏渡大海水。手足疲労生患厭想。在中流中夢覺自念言。何許有河而可渡者。」⁽⁴³⁾

六八

すなわち第七地から第八地上ることは、真の仏因果を得ることを意味するのである。であればこそ、まだ如来の力を身に着けていない菩薩は、

諸仏の助力に恵まなければできないのである。

「若不得十方諸仏神力加勸即便滅度與二乘無異。」⁽⁴⁴⁾

いかにして諸仏の恵みを得られるか。いつまで待つか。それはわからないことである。ここにいたる菩薩は自身の力でどうすることもできなくなり、恵まれるまでに待つ他ない。

これはすなわち十地の中に用意された難関である。菩薩の自身の力でどうすることもできない超えられない障碍であり、自力の修行で免れない「七地沈空」の難である。しかし、これを越えなければ求道の道の目的地に永遠に到達することはできない。

釈尊が「十地経」において如来の「大願力方便智慧力」などを得る菩薩しか七地から八地に至ることができないことを説いたが、如来の助力を得る方法については直接に説いていない。すなわち「七地沈空」の難を免れる方法は十地経に明示されていない。

このようにして、修行の過程の内容を説いたかのようなこの十地経は、その中に「七地沈空」の難を用意しているので、実は自力修行の行き詰まりの必然性を示している。これは十地経に潜めた釈尊の密意ではないか。

その密意を最初にあきらかにするのが天親である。「七地沈空」の難を免れる道が『大無量寿経』によって与えられていることは天親の「浄土論」に示されている。

「観仏本眼力遇無空過者能令速満足功德大宝海故。即見彼仏未証淨心菩薩畢竟得証平等法身、與淨心菩薩、與上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等故。」⁽⁴⁵⁾

この文は、「七地沈空の難」を免れる道が念仏であるということを示している。文にこめられた意味を明解し、天親の受け止めの根拠を明示するのは、曇鸞の「浄土論註」である。

「平等法身者、八地已上法性生身菩薩也。寂滅平等之法也。（中略）未証淨心菩薩者、初地已上七地以還諸菩薩也。（中略）菩薩於七地中得大寂滅、上不見諸仏可求、下不見衆生可度、欲捨仏道証於實際。爾時若不得十方諸仏神力加勸即便滅度與二乘無異。菩薩若往生安樂淨土、見阿彌陀仏、即無此難。」⁽⁴⁶⁾

初地以上七地以下の菩薩は阿彌陀仏を見れば八地以上の菩薩と同じように平等法身を得ることができる。すなわち、初地以上七地以下の菩薩は阿彌陀仏を見るならば、七地を通らなくても八地以上の菩薩と同じように平等法身を得ることができる。「七地沈空の難」に陥らなくても済むのである。その根拠が『大無量壽經』の中での阿彌陀如来の二十二願にあると曇鸞は示している。

曇鸞は「浄土論註」で二十二願の言葉を引きながら、その中の「超出常倫諸地之行」によって次のように推論する。

「按此經推彼国菩薩或可不從一地至一地。言十地階次者、是釈迦如来於閻浮提一応化道耳。他方浄土何必如此。」⁽⁴⁷⁾

二十二願の願文によれば、求道の道の目的地を阿彌陀の浄土に定めるならば、初地以上七地以下の菩薩は阿彌陀如来の願力に乗り、一地一地と通らなくても、いけるのである。七地を通らずに目的地に到達することができ、七地沈空の難を自ずから免れる。

今まで論じてきた唯識についての内容をも踏まえて推察すれば、唯識論に定められた仏教の求道の道の目標である真識は阿弥陀の浄土へと定めるべきだとは自明の理になる。このようにして、十地に潜められる釈尊の密意を明らかにし、それをさらに『大無量寿経』の中での阿弥陀如来の二十二願につなげることによって、天親においての十地と浄土がつながってくる。十地に用意された難関——「七地沈空」の難の受け止め方は、天親においての唯識論と他力念仏の踊り場である。これによって天親の唯識論にこめられた本心も明らかになるであろう。

天親が唯識（唯一の識）論を主張する真意も明瞭になってくる。それは「浄土論」の中で「爲度群生彰一心」⁽⁴⁸⁾によって明示されたように、衆生をすくうために「真識」、一如、一心を明らかにするのである。

「正道大慈悲 出世善根生（中略）大乘善根界（中略）二乗種不生」
「第一諦妙境界」「無分別心」「真實智慧」⁽⁴⁹⁾（『真宗聖教全書』一 269—277 頁 親鸞の引用（『真宗聖教全書』二 132 頁・313））

このように唯識論は、念仏の道とつながっていることを明らかにした。それは決して従来とらえられてきたような人間の自我の心を立てるためではないのである。その一心は、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」の「一心」とは同質のものである。「唯識」——ただの識はただ他力念仏とは別々のものではないのである。

この点で、親鸞はまことに正確に天親の論をとらえている。

結 論

以上の考察によって天親は生涯仏教の真髓を説くために心血を尽くし、

たくさんの釈尊の教えを学んだ上で千部の作を作り、その結晶として浄土論を作りあげたといえよう。

浄土論はたくさんの經典（唯識も含まれている）を踏まえて顕かにされた真実である。「依修多羅顯眞實」。その同時に、浄土論に彰にされた「一心」にはまた「爲度群生」という像法末期という時代におかれた天親の使命感も凝縮されているのである。

このような唯識のとらえ方には親鸞の仏教の発展における重大な貢献も見てくる。親鸞の受け止め方によると、従来仏教の理論の頂点の一つである天親の唯識論は、他力念仏の踏み台になる。念仏は唯識を踏まえて、仏教の理論の頂点の一つを示すことになる。さらに、従来、龍樹の中論と天親の唯識論はそれぞれ仏教の理論の頂点を示すととらえられているが、親鸞は龍樹と天親の二人を一つの念仏の伝統におさめる。このように捉えると、龍樹の中論と天親の唯識論はともに他力念仏の踏み台になる。念仏は中論と唯識を一つの踏み台にして、仏教の理論の頂点を示すことになる。このようにして、念仏は像法時代の末期から今日まで真の仏法の松明として、仏教の理論の頂点に輝くことになる。

註

(1) 『真宗聖教全書』二 502 頁

(2) 『真宗聖教全書』二 45 頁

(3) 『大正蔵』に収められている天親の唯識についての論は次のようである。

「唯識三十論頌」「唯識論」「転識論」（「唯識三十論頌」の異訳）「大乘唯識論」「唯識二十論」

(4) 『大正蔵』に収められている天親の大乘仏教についての論

「撰大乘論釈」「撰大乘論釈論」などを書いた上に、「妙法蓮華經憂婆提舍」「妙法蓮華經論憂婆提舍」「十地經論」「宝髻經四法」「涅槃論」「涅槃經本有今無論」「遺教經論」「文殊師利菩薩問菩提經論」「勝思惟梵天所問經論」「転法輪經憂婆提舍」「金剛般若波羅蜜經論」「能断金剛般若波羅蜜多經論釈」などの大乘仏典の解釈書と「業成就論」「大乘成業論」「仏性論」「中辺分別論」「弁中辺論」「止観門

論頌」「發菩提心經論」（『大正藏』二十五、二十六、二十九、三十、三十一、三十二卷參照）

- (5) 「浄土宗大辞典」
- (6) 「仏教辞典」岩波書店 中村 元など編
- (7) 「唯識論」『大正藏』三十一卷 64 頁 69 頁
- (8) 「転識論」『大正藏』31 卷 60 頁
- (9) 「唯識論」に引用された「十地経」の言葉『大正藏』三十一卷 64 頁
- (10) 「大乘唯識論」『大正藏』31 卷 72
- (11) 「転識論」『大正藏』31 卷 60 頁
- (12) 同(11)。
- (13) 「唯識三十論頌」『大正藏』三十一卷 60 頁
- (14) 「唯識論」『大正藏』31 卷 63 頁
- (15) 「唯識論」『大正藏』31 卷 66 頁
- (16) 「唯識論」『大正藏』31 卷 63
- (17) 「唯識論」『大正藏』31 卷 63
- (18) 『真宗聖教全書』二 503 頁
- (19) 「大乘唯識論」『大正藏』三十一卷 71 頁「入諸法無我」66
- (20) 「大乘唯識論」『大正藏』31 卷 70
- (21) 「大乘唯識論」『大正藏』三十一卷 70
- (22) 「転識論」『大正藏』31 卷 61-63
- (23) 「転識論」『大正藏』31 卷 63
- (24) 「唯識三十論頌」『大藏經』三十一卷 61 頁
- (25) 「唯識論」『大正藏』31 卷 67
- (26) 「唯識三十論頌」『大正藏』三十一卷 61 頁
- (27) 「転識論」『大正藏』31 卷 63
- (28) 「大乘唯識論」『大正藏』31 卷 70
- (29) 「唯識論」『大正藏』31 卷 67
- (30) 「転識論」『大正藏』31 卷 63
- (31) 『真宗聖教全書』二 38 頁
- (32) 「唯識論」『大正藏』31 卷 70
- (33) 「唯識論」『大正藏』31 卷 64
- (34) 「唯識論」『大正藏』31 卷 67
- (35) 「大乘唯識論」『大正藏』31 卷 73
- (36) 「唯識三十論頌」『大正藏』三十一卷 61 頁
- (37) 「大乘唯識論」『大正藏』31 卷 70

天親（世親）の唯識論と親鸞の他力念仏

- (38) 「唯識三十論頌」『大正經』三十一卷 61 頁
- (39) 「十地經」『大正藏』10 卷 536
- (40) 「十住經」卷第三『大正藏』第十卷 519 頁
- (41) 「大方廣仏華嚴經」卷第三十七『大正藏』第十卷 196 頁
- (42) 『真宗聖教全書』二 208
- (43) 「大智度論」卷第十『大正藏』第二十五卷 132 頁
- (44) 『真宗聖教全書』二 208
- (45) 「浄土論」『真宗聖教全書』一 274 頁
- (46) 『真宗聖教全書』二 208
- (47) 『真宗聖教全書』二 208
- (48) 『真宗聖教全書』二 45 頁
- (49) 『真宗聖教全書』一 269-277 頁 親鸞の引用『真宗聖教全書』二 132 頁